

独思録：「天皇、皇后両陛下ご結婚50年」(4/12)

芥川龍之介に「結婚難並びに恋愛難」というエッセイがあります。

「あなたがたはゼライドの話を知つてみますか？ゼライドは美しい王女です。何でも文献に徴すれば、足は蠟石の如く、腿は象牙の如く、臍は真珠貝の孕める真珠の如く、腹は雪花石膏の甕の如く、乳房は百合の花束の如く、頸（うなじ）は白鳩の如く、髪は香草の如く、目は宮殿の池の如く、鼻は城門の櫓の如くだつたと言ふのですから、万人に一人もない美人だつたのでせう。このゼライドも年ごろになるにつけ、誰か然るべき相手を定めて結婚することになりました。」

ということで、御付の者達は、洋の東西に至る数々の国々から、

「第一号、印度の王子。第二号、ペルシアの王子。第三号、ゼライド自身の国の宰相の子。第四号、バビロニア王。第五号、支那の王子。第六号、リディア王の宰相の子。第七号、メディア王の宰相の子。第八号、ユダヤ王の宰相の子。第九号、エジプトの王子。第十号、魔神（ジン）の王チアン・ベン・チアン。」

など、容貌も美しく、学問にも富み、武勇に秀でた、実に二百八十人の候補者の名を挙げて、ゼライド姫に相応しい結婚相手を選び、三年七ヶ月十六日かけてゼライド姫に候補者表を作り、手渡されたそうです。

しかし、龍之介は「ゼライドは王女だつた上に大へん賢い生れつきでしたから」彼女自身のお目がねにかなつた王子や宰相の子はその中にはおらず、結局は、

「或月の澄み渡つた晩、ゼライドは彼女の恋人と一しよにそつと王宮を抜け出しました。アラビアの恋愛至上主義の詩人、『大いなる』デチアルはかう彼女の事を歌つてみます。

ゼライドよ！ 沙漠の薔薇よ！

君の恋人は幸ひなるかな！

君は君の恋人の杖、

君は君の恋人の齒、

君の恋人は恵まれたるかな！

おう、ゼライドよ！ 沙漠の泉よ！

『君の恋人の杖』や『君の恋人の齒』は多少妙に聞えるかも知れません。が、美しいゼライドの恋人は あなたがたはどんな男だつたと思ひますか？行年七十六とか言ふ、醜い黒ん坊の奴隷だつたのです。」

と伝えていきます。

さぞ、ご両親である王、王妃、そして家臣のみならず、国民もさぞ驚かれたことでしょう。

姫と王子の立場は逆転しますが、日本国民も、今上天皇陛下と皇后陛下のご結婚に、ある驚きと喝采をもって向かえたのではなかったでしょうか。

あれから50年、天皇、皇后両陛下は金婚式を迎えられました。100年に1度あるかないかの不況の中での祝賀、行事は4/10一日で終わってしまいました。

でも、今後、写真集やマスコミの色々な特集などで、過っての新時代の予兆に日本中が熱狂した半世紀を振り返り、大いに国民を煽り、現在の暗い世の中の打破、経済効果を生み出すきっかけを作って欲しいものです。

小沢秘書による政治資金規正法違反による逮捕・起訴事件のように、検察側のリーク情報に踊らされ、今は麻生内閣の大盤振る舞いの景気対策を検証することなく報じ、二階経産相の件は忘れた様子、マスコミの熱し易く冷め易い報道姿勢を時には苦々しく思っています。

しかし、国民全員を明るくする天皇、皇后両陛下の金婚式、大いに長く加熱して盛り上げ景気回復の一起爆剤にして欲しいと思います。

どう考えてみても、マスコミはそのような頭は持ち合わせていないでしょうね。



日経：「天皇、皇后両陛下ご結婚 50 年 お互いに感謝状」(4/10)

天皇、皇后両陛下は 10 日、結婚 50 年を迎えられた。天皇陛下は 75 歳、皇后さまは 74 歳での金婚式となった。皇居・宮殿で同日、麻生太郎首相ら三権の長や各皇族方による祝賀、今年金婚式を迎える夫婦約 100 組との茶会などが行われる。

これに先だって行われた記者会見で、天皇陛下は皇后さまに対し「(結婚を)承諾してくれたときは本当にうれしかったことを思い出します。50 年間よく努力を続けてくれました」とねぎらわれた。皇后さまは「(50 年前)不安と心細さで心がいっぱいでした。今日こうして陛下のおそばで、金婚の日を迎えられることを、本当に夢のように思います」と答えられた。



<芥川龍之介（1892-1927）>

小説家。号は澄江堂主人、俳号は我鬼。東京市京橋区入船町生まれ。東京帝国大学文科大学英文学科卒。

1916年12月より海軍機関学校の嘱託教官（担当は英語）として教鞭を執るかたわら創作に励み、翌年5月には初の短編集『羅生門』を刊行、その後も短編作品を次々に発表し、11月には第二短編集『煙草と悪魔』を発刊。1918年、教職を辞して大阪毎日新聞社に入社。

その作品の多くは短編で、『芋粥』『藪の中』『地獄変』『歯車』など、『今昔物語集』『宇治拾遺物語』などの古典から題材をとったものが多い。また『蜘蛛の糸』『杜子春』など、童話も書いている。

芥川の業績を記念して菊池寛が芥川龍之介賞を設けた。



春秋：「50年前の日本」(4/11)

人口は9300万人。1人の女性が生涯に産む子供の数を示す合計特殊出生率は2.04。実質経済成長率は約9%で、実質的な経済規模は日本のおよそ9分の1。どこの国だろう。50年前の日本である。

1959年、日本は岩戸景気と呼ばれた好景気の真ただ中であつた。池田勇人内閣が10年間で国民所得を2倍に増やす「所得倍增計画」を打ち出したのは翌60年のことだ。白黒テレビ、冷蔵庫、洗濯機の「三種の神器」がもてはやされ、国民の労働意欲を誘った。平均月給が2万円そこそこだった時代だ。

敗戦の傷跡から立ち直り、高度経済成長路線をひた走った日本。ひいては世界第二の経済大国に押し上げた原動力は何だったのか。未来への希望か、明日は今日よりきっと良くなると信じた勤勉さ、ひたむきさか。成熟社会を迎えた今の日本が忘れた熱気があつたような気がする。

天皇、皇后両陛下が結婚50年を迎えられた。旧皇族、華族出身でない正田美智子さんを皇太子妃に選んだ明仁皇太子。新時代の予兆に日本中が熱狂したあのころ。両陛下の結婚50年を機に自らの半世紀を振り返り、昔を懐かしむ方も多いただろう。だが熱気はうせても成熟社会にはそれなりの価値観がある。両陛下には平成の世を永く見守っていただきたい。

< 池田勇人 (1899-1965) >

第58代から第60代まで内閣総理大臣を務めた19世紀生まれの最後の首相。

広島県吉名村(現・竹原市)生まれ。京都帝国大学法学部卒。

佐藤栄作と並び吉田学校の双壁であり、吉田茂の最側近として、連合国との講和、冷戦下における日米関係の構築にかかわると同時に、戦後日本経済の再編成においても指導的な役割を担う。

首相就任後は所得倍增計画を打ち出して、日本の高度経済成長の進展にもっとも大きな役割を果たした政治家の一人。



天声人語：「50年の起伏」(4/10)

新美南吉（にいみ・なんきち）の童話に「でんでんむしのかなしみ」がある。背中の殻に悲しみが詰まっているのに気づいた一匹が、もう生きていられぬと友達に相談する。ところが、みんなの殻も悲しみでいっぱいだった。

98年、インドであった国際児童図書評議会でのビデオ講演で、皇后さまがこの本に触れた。「自分だけではないのだ。私は、私の悲しみをこらえていかなければならない。この話は、このでんでん虫が、もうなげくのをやめたところで終わっています」。

民間出身の初のお妃（きさき）として、言葉に余ご苦労もあったろう。静かな笑みの下の悲しみは殻に納め、あるいは陛下と分かち合って歩んでこられた。「よく耐えてくれたと思います」という夫君の感慨が、50年の起伏を物語る。

あの日、馬車パレード取材した渡辺みどりさん（74）は、間近の美智子さまに打たれた。「お顔がむき身のゆで卵のようにピカピカで、胸のあたりはピンク色をして、はじけんばかりの美しさでした」。その花嫁は何より、戦後日本の新時代を告げていた。

一番の旧家にも新風が吹き込んだ。浩宮さまをご自分の母乳で育てたのも一例だ。含（ふ）む乳（ち）の真白きにごり溢（あふ）れいづ子の紅の唇生きての歌が残る。平和憲法の下で皇室と大衆を近づけた、ご夫妻の功は大きい。

ピカピカ、ピンク色の日本は戻らなくても、半世紀の平和が残したものは数知れない。皇室の姿をめぐる自由な論議もその一つだろう。祈ること、継ぐこと。悠久の時間が紡いだ遺産を託され、思案を重ねる家族を思う。生身の男女を思う。

< 新美南吉（1913-1943） >

児童文学作家。愛知県半田市出身。本名は新美正八（旧姓：渡辺）。雑誌『赤い鳥』出身の作家。彼の代表作『ごん狐』（1932年）はこの雑誌に掲載されたのが初出。童話の他に童謡、詩、短歌、俳句や戯曲も残した。



地方で教師を務め若くして亡くなった童話作家という共通点から宮沢賢治との比較で語られることも多く、賢治が独特の宗教観・宇宙観で人を客体化して時にシニカルな筆致で語るのに対し、南吉は人から視た主観的・情緒的な視線で自分の周囲の生活の中から拾い上げた素朴なエピソードを脚色したり膨らませた味わい深い作風で、「北の賢治、南の南吉」と呼ばれ好対照をなしている。

童話集に『おぢいさんのランプ』『牛をつないだ樁の木』『花のき村と盗人たち』がある。

< 渡辺みどり（1934-） >

ジャーナリスト。皇室評論家。文化女子大学教授。東京生まれ。早稲田大学卒業。日本テレビの公募入社第1期生としてテレビ番組の制作に携わる。



1966年以降25年間にわたって制作した三つ子の家族のドキュメンタリー番組は高く評価され1980年に民放連盟賞テレビ社会部門最優秀賞を受賞。

女学館時代の友人や自宅近所の知り合いを通じて美智子皇后と親交を結び、1959年の皇太子成婚記念パレード中継にかかわったのを皮切りに、皇室報道で活躍。1984年にはチーフ・プロデューサーになり、昭和天皇崩御特番でも総責任者を務めた。皇室関係の著作多数。

著書に『シャネル・スタイル』『皇后美智子さまと雅子妃 平民妃 10年の苦闘』『人に愛される気品のマナー100』などがある。

編集手帳：「共振した皇室と国民の心」(4/10)

もしもし／ベンチでささやくお二人さん の「若いお巡りさん」も、君を頼りに私は生きる の「ここに幸あり」も昭和30年代初期の歌である。

“二人”が主題の歌はほかにもあり、孤独が基調の大衆歌謡史に異彩を放つ とは演出家、鴨下（かました）信一さんの指摘である。文春新書「誰も『戦後』を覚えていない昭和30年代篇（へん）」に書いている。終戦から十年余を経て迎えた「小さな幸せ」願望の時代であったと。

あの日、列島が沸き立ったのも、恋の実りという平和あつての「小さな幸せ」に皇室と国民の心が共振したからだろう。天皇、皇后両陛下のご結婚から、きょうで50年になる。

震災があれば避難所の床に膝（ひざ）をつき、被災者の手を握っていたわりの言葉をお掛けになる。悲しむ人に寄り添い、祈ってこられた両陛下の半世紀である。お疲れもあろう。どうかご無理をなさらずに。

やはり当時の歌に、「喜びも悲しみも幾歳月」がある。妻と二人で沖行く船の／無事を祈って灯（ひ）をかざす。思えば人の世は嵐の海、人はそれぞれに「小さな幸せ」を載せた船をこいでいる。お二人の姿にその詞が重なる。

< 鴨下信一（1935-） >

演出家、東京放送（TBS）相談役。東京都出身。東京大学文学部卒業。

『岸辺のアルバム』や『ふぞろいの林檎たち』といった人気ドラマの演出のほか、文学通としても知られ、『忘れられた名文たち』など日本語の文章に関する著作がある。



演出を手がけた主なテレビドラマに『岸辺のアルバム』『女たちの忠臣蔵』『思い出づくり』などが、著作に『忘れられた名文たち』『面白すぎる日記たち』『日本語の呼吸』『誰も「戦後」を覚えていない』などがある。

余禄：「両陛下ご結婚50年」(4/10)

「私は今でも、昭和34(1959)年のご成婚の日のお馬車の列で、沿道の人々から受けた温かい祝福を、感謝とともに思い返すことがよくあります」。皇后陛下が5年前に述べた言葉だ。それは「あの日……」と続く。

「民間から私を受け入れた皇室と、その長い歴史に傷をつけてはならないという重い責任感とともに、あの同じ日に、私の新しい旅立ちを祝福して見送ってくださった大勢の方々の期待を無にし、私もそこに生を得た庶民の歴史に傷を残してはならないという思いもまた、その後の歳月、私の中に常にあったと思います」。

この日、お二人のパレードは、普及し始めたテレビの中継で1500万以上の人々が見つめた。日本社会がまだ見ぬ明日へむけ経済成長の坂道を一気に駆け上がろうとした時代だ。「時代の幸福」 - - そんな言葉も浮かぶパレードの記憶だ。

この数年前、当時20代の皇太子だった天皇陛下は東宮参与の小泉信三に結婚相手について語ったという。「自分は生まれや環境から世間の事情にうとく、人に対する思いやりの足りない心配がある。どうしても人情に通じて、深い思いやりのある人に助けてもらわねばならない」。

その陛下は婚約内定の時、こんなお歌を詠んだ。「語らひを 重ねゆきつつ気がつきぬわれのところに 開きたる窓」。お二人の語らいが開いた窓からは、やがて親子が家族のぬくもりを共にし、国民と心通いあう新しい皇室の形が生まれた。

その後の戦没者慰霊や被災地訪問などで国民と苦楽を共にし、その幸福や平和への祈りを絶やさない両陛下の50年はご存じの通りだ。かぐわしい風の通う窓は人々の心にも開かれた。

< 小泉信三 (1888-1966) >

経済学者。今上天皇の皇太子時代の師父。慶應義塾塾長(1933~1947)。東京市芝区生まれ。慶應義塾大学部政治科卒業。

自由主義者の立場に立脚し、共産主義、マルクス経済学を批判。講和問題でもソ連とは講和しない単独講和論を主張。

戦後継宮明仁親王(現・今上天皇)の教育掛(東宮御教育常時参与)として、「ジョージ5世伝」などを講義。

著書に『練習は不可能を可能にす』『青年小泉信三の日記：明治四十四年-大正三年：東京-ロンドン-ベルリン』『ペンは剣よりも強し』『福沢諭吉』『私の福沢諭吉』など。

